
【CLANNAD】もしもシリーズ

坂上智代は俺の妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【CLANNAD】もしもシリーズ

【Nコード】

N8643M

【作者名】

坂上智代は俺の妻

【あらすじ】

CLANNAD二次創作

（前書き）

もしも俺と智代の歩んだ道がCLANNADの智代バツトEDになったら。

もしもシリーズ

「ぐつち……」

「智代……」

ふたり、キスをした。

……。

「……」

寝息一つなく眠る智代。だが、以前のようなときめきを感じない。智代の眼から出会った時の自信と希望に満ち溢れていた光が消えたからだ。

今はまるで死んだ魚のように光がなく濁っている。

全ての原因は俺にあると言っても過言じゃない。俺のせいで夢を叶えられなくなったのだから……。

それは他人から見ればちっぽけなものかも知れない。でも、智代にとっては命を賭けてでも叶えなければならぬ大切な夢であり……約束だった。

もし、俺が居なければ智代は問題なく普通にその夢を叶えられただろう。

智代には十分にその夢を叶える力もあったし、その上で努力も惜しまなかったのだから叶わない道理がない。

そう全ては俺という足枷のせいだ。

夢をなくした智代は俺に依存するようになった。

高校生にふさわしくないことも沢山して、互いの肌を重ねた回数
は数えきれないほどだ。

もとより、精神的に脆い部分がそれに拍車をかけた。

智代の世界には俺しか存在しなくなり、俺以外のことはどうでも
よくなったようだ。

俺は心の何処かでこの展開を望んでいたのかも知れない。
しかし、実際それを手にしてみると思ったほどの幸福は得れな
った。

それは何故？

答えは自問自答するまでもなく出ている。智代が心から笑ってい
ないからだ。

好きな人にはやはり笑っていて欲しい。

自分ひとりの幸せで満足するなら、それは恋愛じゃないと思う。
だから、俺は智代の光を奪った原因を排除することにした。

智代の夢は本当に叶えられなくなったのか？

いや、違う。智代が探したのは表の方法に過ぎない。

手段さえ選ばなければ方法など沢山ある。

だが、リスクは少ない方が良い。

そうなるか……。

「智代、これを英文に直してくれないか？」

俺は智代に文を渡した。

「……別に構わないが一体何に使うんだ？」

「今は理由を言えないんだ。でも、どうしても必要なんだ。あとで
必ず理由を話すから今は何も聞かないでくれ」

「……わかった」

そう言って智代は俺の渡した文を英文に直し始める。

堕ちたと言っても流石は智代である。凡人なら一時間はかかるで
あろう文をたったの数分で直してしまった。

「出来たぞ」

智代が英文に直した文を俺に差し出す。

「ありが……」

礼を言って智代から文を受け取ろうとするが……。

「文から手を離してくれないか？」

「理由も聞かずにやってやったのだから何か見返りがあっても良い

だろう？」

「いや、だからありがとう」

「口だけなのか？」

智代は頬を膨らませてあからさまに不機嫌そうな顔をする。

「いや、まだ明るいし……」

「私は気にしないぞ」

依存はどこまで人を墮落させるのだろうか？ もはや、智代の辞書にモラルという文字は消えてしまったようだ。

こんな智代は見なくなかった。そうさせてしまった俺が言うことではないが……。

「智代……」

「ぐっち……」

ふたり、キスをした。

……。

俺の智代は本当にキス魔だな。まあ、嬉しいけど……。

翌日。俺は智代が直してくれた文を持ってオープンテラスがある喫茶店に向かう。

昨日ある人物と待ち合わせの約束を取りつけたからだ。

正直ソイツとは二度と顔を合わせなくなかったが、智代のためだ仕方がない。

喫茶店に着き待つこと5分。因みに彼は遅刻した訳ではない。

まだ約束の時間の5分前だ。駆け引きとして先手を取るためと、後光を得るために俺が早くきただけに過ぎない。

「まさか君から声をかけられとは思わなかったよ。僕は忙しいんだ、手短に頼むよ」

智代との交際を度々忠告してきた男が現れた。光坂高校の生徒会長でもある。

「先ずはこれを見て欲しい」

そう言っただけ俺は彼に文を見せる。

彼は文に目をやると直ぐに目の色を変えた。瞬時にこの文の非凡さを見抜くとは流石は秀才と言ったところだろうか。

「……正直驚いたよ。まさか君がこれほどの文を書けるなんて……」その文を凡人が書くのは不可能である。

「……智代だよ」

男の目に侮蔑の色が浮かぶ。彼の中で智代は既に終わったのだらう。

「ああ、彼女か。なら納得だよ。これほどの力を持つてるのに……愚かな女だよ、全く」

選挙開票日のことを言ってるのか？ それとも忠告を無視したかどうか？

恐らく両方だろう。

「……確かにその通りだな。だが、智代には絶対に叶えなければならぬ夢がある。だが俺のせいでその夢を壊してしまった。俺には智代の夢を得るチャンスをもう一度与える義務がある」

「それに僕が協力しろと？ 馬鹿馬鹿しい、そんなこととして僕に何のメリットがあるんだい？ 同情を買おうとしても無駄だよ」

彼は呆れ果てた顔をした。

俺は内心ほくそ笑む。もとより同情なんか通じないのはわかってる。要はメリットを与えれば良いんだ。

「因みに智代はその文を書くのに何分かつたと思う？」

文の内容は俺が一ヶ月かけて考えたものだがそれをあえて言う必要はない。

「数時間……いや智代なら数十分か」

狙い通り誤認してくれたみたいだ。

「いや、数分だよ」

「!？」

彼は信じられない物を見るかのような目で俺を見る。

「俺の頼みを聞いてくれたら智代が生徒会の仕事を手伝う。これはすごいメリットだと思わないか？」

「……僕は何をすれば良いんだい？」

「その文の発表と桜の木を切らずに済むよう署名運動をしてくれ」

「わかった。協力するよ」

交渉成立。

冬が明け春になった。

笑顔で桜並木を歩く姉と弟。

約束は果たされた。

そして智代の目に以前の輝くほどに眩しかった光が戻った。

全て順調で光に満ち溢れている。

道はひとつじゃない！ 一人では叶わなくとも、二人ならば……。

どんな苦難さえも乗り越えることが出来る。二人の未来には無限の可能性がある！

E
D

（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございます

智代「ありがとう。ぐっちのお陰で約束を果たすことが出来た」

「もとはと言えば俺のせいで駄目になったんだからね。礼を言われることじゃないよ……」

智代「それは違うぞ。ぐっちが居なければ私はこんなにも世界が美しいということに気付かなかった。世界の素晴らしさを教えてくれたのはお前だ」

「智代……俺と結婚しないか？ これからの人生を智代と歩みたいんだ」

智代「うん、私もぐっちの側でお前を支えたい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8643m/>

【CLANNAD】もしもシリーズ

2010年10月8日13時55分発行